

P-063

将来の親世代の養護性、次世代育成能力
および子どもをたたくことについての
態度に関する調査 -男女による比較-井田 歩美¹、亀田 直子¹、池田 友美¹、辻 佐恵子²、
鎌田佳奈美¹¹摂南大学看護学部²北里大学看護学部

【目的】

本研究の目的は、子育てにおける養護性、次世代育成能力および子どもをたたくことについて青年期の男女を比較することで、将来の親世代を対象とした「たたかない子育てプログラム」作成に向けた基礎的資料とすることである。

【方法】

対象は、Web調査会社にモニター登録を行っている18～24歳の男女である。調査項目は、性別と「養護性尺度」25項目(棚澤ら,2009)、「次世代育成能力尺度」20項目(寺本ら, 2015)、「子どもをたたくことについての質問票(日本語版)」13項目(以下、ATS尺度)(馬場ら,2020)とした。「全くあてはまらない」から「とてもよくあてはまる」の6段階もしくは7段階のリッカート法により数量化した。分析は、IBM SPSS Statistics ver.28を使用し、男女間の比較には、 χ^2 検定、t検定を行った。

【倫理的配慮】

回答者は、調査概要等を記した文章を読み、協力に同意した場合のみ設問画面に進むこととなり、送信前であれば、協力への撤回は担保されている。本研究は、所属大学の「人を対象とする研究倫理審査」の承認を得て実施した(No.2023-075)。

【結果】

分析対象401人のうち男性は206人(51.4%)、女性195人(48.6%)であった。次世代育成能力尺度の4つの下位尺度のうち「継承」「地域力」では男女による有意差はみられなかったが、「誕生肯定」「自己成長」は有意に女性の得点が高かった($p<0.05$)。養護性尺度の4つの下位尺度のうち「技能」「準備性」「非受容性」では男女による有意差はみられなかったが、「共感性」は有意に女性の得点が高かった($p<0.05$)。一方で、ATS尺度の得点は、男性41.72(SD14.789)、女性32.46(SD16.629)と有意に男性が高かった($p<0.05$)。

【考察】

本調査では、子どもの誕生に対する肯定的な態度、子どもの養育過程における自身の成長への期待、養育に意義を見出す態度および子どもに対する共感や関心は女性の方が高く、寺本ら(2015)、棚澤ら(2009)の結果を支持した。また、男性の方が子どもをたたくことを容認する傾向であることが明らかとなった。プログラムの作成には、性差による態度の特徴を考慮する必要性が示唆された。(本研究はJSPS科研費23K10073の助成を受け実施した)

P-064

将来の親世代の養護性と子どもをたたく
ことについての態度に関する調査
-子どもとの接触体験による比較-鎌田佳奈美¹、井田 歩美¹、池田 友美¹、亀田 直子¹、
辻 佐恵子²¹摂南大学看護学部²北里大学看護学部

【目的】

将来の親世代を対象とした「たたかない子育て啓発プログラム」作成の基礎資料とするため、本研究は18～24才の青年の子どもとの接触体験による養護性および子どもをたたくことについての態度を明らかにすることを目的とした。

【方法】

調査会社に登録している18～24才の青年に対しWEBによる横断的調査を実施した。調査項目は性別、きょうだいの有無、子どもとの接触体験および、「養護性尺度」25項目、「子どもをたたくことについての質問票(日本語版)」13項目(以下、ATS尺度)等とした。「全くあてはまらない」と「とてもよくあてはまる」を両極とし、6および7段階リッカート法で回答を求め点数化した。ATS尺度は点数が高いほど子どもをたたくことに肯定的であることを示す。いずれの尺度も信頼性妥当性は検証されている。

【倫理的配慮】

本調査は、所属大学の「人を対象とする研究倫理審査委員会」からの承認と対象者の同意を得て実施した。使用したいずれの尺度も作成者から許諾を得た。

【結果】

分析対象は401名のうち52.9%は学生で、きょうだい数は2人が38.4%と多かった。子どもとの接触頻度は「毎日」～「週に1～2回」を子どもとの「接触体験あり」、それ以下を「接触体験なし」とし2群間で比較した。子どもとの「接触体験あり」は63人(15.7%)「接触体験なし」が338人(85.3%)であった。養護性の4下位尺度得点の比較では<共感性><技能><準備性>で「接触体験あり」の方が有意に高かった($P=.023\sim<.001$)。<非受容性>は2群間に差はなかった。ATS得点は「接触体験あり」が「接触体験なし」より有意に高かった($P=.003$)。

【考察】

今回の調査は「接触体験あり」群の方が、養護性は高いが子どもをたたくことを肯定しているという結果であった。子どもは保護する存在であるが、自己中心的な特徴も合わせ、関わる者にとってはアンビバレントな存在である。子ども接触体験が多いもののほど否定的な側面も含め多面的に理解している可能性がある。このことは野村ら(2007)の結果を支持した。子どもの泣きや拒否といった負の側面も含め受容できるようなプログラムを検討する必要性が示唆された。(JSPS科研費23K10073助成研究)